



Data

監督・脚本・原案：ジョン・パトリック・シャンリイ

原作：『ダウト - 疑いをめぐる寓話』
(白水社刊)

出演：メリル・ストリープ / フィリップ・シーモア・ホフマン /
エイミー・アダムス / ヴィオラ・デヴィス / ジョセフ・フォスター二世

👁️👁️ みどころ

私は昔から「ナポレオン」や「ダウト」というトランプゲームが大好きだったが、本作はそんなお気軽なゲームではない。テーマはメリル・ストリープ演ずる厳格なカトリック学校長の心に芽生えた、フィリップ・シーモア・ホフマン演ずる人気花形神父と黒人男子生徒との間の不適切な関係をめぐる「ダウト」！大成功した舞台劇の映画化は難しいが、『フロスト×ニクソン』(08年)をみても成功の確率は高いはず。会話劇のスリルと面白さ、そして言葉の重みと迫力を堪能したい。ちなみに、少しこれをアレンジすれば日本版『ダウト』の創作も可能では・・・？

傑作舞台劇から傑作映画へ！

プレスシートによれば、2004年秋にオフ・ブロードウェイで初演された舞台劇『ダウト』はその後すぐにブロードウェイでの上演が決定されて大ヒットし、2005年のトニー賞最優秀作品賞をはじめ主要4部門とピュリッツァー賞演劇賞をダブル受賞した傑作舞台劇。他方、本作の脚本を書き自ら監督したジョン・パトリック・シャンリイは、『月の輝く夜に』(87年)でアカデミー賞脚本賞に輝き、脚本家として長く映画の世界で活躍してきた人物で、戯曲『ダウト』を書いた人物。つまり、舞台劇として大ヒットしたのならきっと映画化しても成功するはずと考えたわけだが、舞台と映画は別モノ。したがって、舞台の成功は必ずしも映画の成功に結びつくものではない。しかし、素材の良さは保証されているのだから、いい俳優を得ていい演出をすれば映画でも成功する可能性が高いのは当然。

舞台劇の傑作が映画でも大成功した例は、2月9日に観た『フロスト×ニクソン』(08年) もちろん、私自身の目で舞台と映画を見比べることはできないが、『フロスト×ニクソン』と同じように選り抜かれた言葉の応酬による「会話劇」の迫力と面白さに脱帽。麻生総理をはじめとして「言葉の軽さ」が目立つ日本人政治家や、近時レベルの低下が心配される法科大学院の院生や若手弁護士は、こんな迫力ある会話劇から学ぶことが多いのでは。

あの女優の真骨頂がここに！

プレスシートによれば、ジョン・パトリック・シャンリイが戯曲『ダウト』を映画化するについては、企画段階からカトリック学校長のシスター・アロイス・ボーヴィエ役にメリル・ストリープを思い描いていたらしい。この映画のポイントはタイトルどおり「ダウト」だが、トランプの「ダウト」なら誤ったカンや確信で「ダウト！」と宣言してもゲームに負けるだけ。しかし校長たるシスター・アロイスが司祭のフリン神父(フィリップ・シーモア・ホフマン)に対して、この映画で描かれるような「ダウト」をかけたら大問題になるのは当然。

酒に酔って夜遅く自宅に戻った亭主の上着に口紅がついていたとして夫に浮気？不倫？と「ダウト」をかけるのは妻の特権だが、そんな場合概ね妻が心配するほど亭主はモテてないものと相場は決まっている。しかし、この映画におけるシスター・アロイスのフリン神父に対する「ダウト」は執拗で確信に満ちたもの。

前作『マンマ・ミーア』(08年)では年齢を無視し(?)、またガラにも似合わず(?)底抜けに明るい母親役を目いっぱい演じたメリル・ストリープだが、うってかわって本作では何とも難しい性格の女性シスター・アロイスを熱演。本作でのゴールデングローブ賞主演女優賞ノミネートを含めて史上最多23回のノミネートを受けた(アカデミー賞ノミネートは14回、主演女優賞1回、助演女優賞1回受賞)メリル・ストリープは、やはりこんないい好きない役(?)でこそ真骨頂が。

1964年VS2004年VS2008年

ジョン・パトリック・シャンリイの戯曲『ダウト』が初演されたのは2004年だが、そこに描かれているのは1964年当時のニューヨークのブロンクスにあるカトリック学校、セント・ニコラス・スクールで起きたある「ダウト」。日本人にはわかりにくいのが、1964年(60年代前半)のアメリカは、ケネディ大統領の登場と暗殺、マーティン・ルーサー・キング牧師による公民権運動の高揚に象徴される、大きな価値観転換の時代。つまり1950年代に多くのアメリカ人が信じていた思考方法、行動様式に「ダウト」が突きつけられたわけだ。ベトナム戦争反対の大きなうねりが生まれたのもこの時代。日本でもその影響を受けて、1960年代後半には学園紛争が生まれることになった。

他方、舞台劇「ダウト」が上演されて絶賛された2004年は、2001年の9・11テロを契機としたアフガン戦争の発生とイラク戦争の開始でアメリカが大きく揺れ動いた時代。そして、映画化された本作が上映される2009年は、サブプライムローン問題に端を発したアメリカ発の金融危機が全世界に波及し深刻な経済危機を招くと共に、オバマ新大統領の「チェンジ」に大きな期待がかかっている激動の時代。

「ダウト」の中身は？

オバマ新政権の国務長官として2月16日来日したヒラリー・クリントンは第42代大統領ビル・クリントンの妻。第37代大統領ニクソンは「ウォーターゲート事件」で大きな汚点を残したが、クリントン大統領が残した汚点はホワイトハウス実習生のモニカ・ルインスキーとの「不適切な関係」。しかし、この映画が描くシスター・アロイスのフリン神父に対する「ダウト」とは？

それは、セント・ニコラス・スクール唯一の黒人男子生徒ドナルド（ジョセフ・フォスター二世）とフリン神父との「不適切な関係」だ。ドナルドはフリン神父が行う礼拝の侍者役だが、その担任である新米女性教師シスター・ジェームズ（エイミー・アダムス）がシスター・アロイスに対して、フリン神父がドナルドに強い関心を持っていると報告したことから、シスター・アロイスの「ダウト」は深まっていく。酒臭い息をしたドナルドとフリン神父が2人きりしているところを目撃したシスター・ジェームズは、当然の義務としてそれを報告したわけだ。

フリン神父を校長室に呼んだシスター・アロイスの追及は厳しく、曖昧な答えを許さなかったため、仕方なくフリン神父が答えたのは「ドナルドが祭壇用のワインを飲み、そのスキャンダルから生徒を守ろうとした」というもの。純真なシスター・ジェームズはたちまちこれを信用して「これにて一件落着」と喜んだが、さまざまな人生経験をしているシスター・アロイスはそうはいかず、彼女の「ダウト」は深まるばかり。さあフリン神父とドナルドとの間に「不適切な関係」はあったの？それともフリン神父はただ1人の黒人生徒であるためいじめられっ子となっているドナルドを守るため、あれこれと目をかけていただけ？

弁護士目で見ると

35年間弁護士稼業を続けてきた私は、フリン神父の説明を聞いて単純に納得するシスター・ジェームズの姿勢には同調できず、あくまで「ダウト」をかけて真相究明を目指すシスター・アロイスの姿勢に賛成。もっとも、何の証拠もなく一方的に「ダウト」をかけたフリン神父は迷惑千万。これでは、シスター・アロイスはかんぼの宿を109億円でオリックスに売却することに「ダウトあり！」と主張し調査に乗り出した鳩山邦夫総務大臣のようなもの・・・？

ただし、決定的に違うのは、総務大臣は法律にもとづく立ち入り調査権等の権力を持っているのに対し、シスター・アロイスは何の権力も持っていないこと。したがってあくまで言葉の勝負、つまりディベートによって決着をつけなければならないのだが、弁護士私の目にはそんな2人の今後の言葉の対決に興味が高まっていくばかり。

校長と神父の価値観の対立がすべての根源！

1964年は価値観が大きく変動した時代だけに、同じセント・ニコラス・スクールで校長と司祭として働いていても、シスター・アロイスとフリン神父の価値観が正反対だったのは仕方がない。しかしそれが、ある「ダウト」によって反目しあうと大変な事態に。

鉄の規律を重んじるシスター・アロイスの厳格さは徹底している。というより想像を絶するもので、いわばナチスドイツのゲシュタポみたいなもの・・・？それを実感するのは、第1に情け容赦ない彼女自身による監視の目。シスター・アロイスの目にかかれれば、生徒たちがかげに隠れてコソコソ悪いことをやっているのはすべてお見通し。したがって、「校長室へ！」というのが生徒たちにとって最大の恐怖だ。第2は、シスターたちが集まった食事風景。ここではきっと「食事中はおしゃべり厳禁！」なのだろう。シスターたちは気まずい沈黙の中、黙々とナイフとフォークを使って皿の上の料理を口に運んでいるが、これでは全然おいしくないはず。

フリン神父の説教が示唆に富み、聴衆に深い説得力を与えるのは、神への敬虔な信仰心もさることながら、きっと彼の豊かな人生経験にもとづく大きな「人間力」のため。いつの時代でも保守派VS進歩派、守旧派VS改革派が存在するが、教会のあり方をめぐる議論においてもシスター・アロイスとフリン神父は正反対で、フリン神父は当然進歩派であり改革派。そんなフリン神父が、生徒たちや多くの信者に尊敬されていたのは当然。したがって、フリン神父の食事風景はシスター・アロイスとは正反対。同僚の神父と一緒に食事風景は、やかましすぎるのではないかと心配するほど大声で話し合い、大声で笑い合う楽しそうなもの。かねてから指摘されていた飲酒癖が原因で財務大臣と金融担当大臣を辞任せざるをえなくなった中川昭一氏ほどではないが、その食事の席にはワインも出されているようだ。

この映画を理解するためには、1964年という時代設定の中だからこそ浮かびあがる、この2人の対立する価値観をまずきっちり理解することが必要だ。

見どころ会話劇 その1、アロイスVSジェイムズ

映画冒頭に登場する、教会の大聖堂でフリン神父が多くの信者や生徒たちに対して語る「疑惑というものも強力な絆になり得るのです！」という説教が興味深い。この映画では、これを含めてフリン神父の説教が3回登場するが、その内容はどれもすばらしいものだから注目したい。

あえて「疑惑」をテーマとした説教をフリン神父がしたのは、シスター・アロイスに対するあてつけ？純真な新米教師のシスター・ジェイムズがそう感じたのは当然。それは、この映画のさまざまなシーンで見せつけられる、シスター・アロイスの生徒たちに対するあまりに度を過ぎた「疑惑」のオンパレードをみればすぐにわかる。

生徒の言葉をすぐに信用するシスター・ジェイムズに対して、校長のシスター・アロイスが説くのは「物事を“疑惑”の目で見なければならぬ」ということ。それに対して、シスター・ジェイムズは「疑惑をもつことによって神様が遠ざかってしまう」と反論するが、それに対するシスター・アロイスの再反論は「悪事に立ち向かおうと1歩踏み出せば、それは神様から1歩遠ざかることになる。しかし、それは神のために成す行為だ」というものだ。

さああなたは、こんなシスター・アロイスとシスター・ジェイムズのディベートについて、どちらの軍配を？

見どころ会話劇 その2、アロイスVSミラー夫人

出演シーンは少ないが、本作の会話劇で大きな存在感を示すのがドナルドの母親であるミラー夫人（ヴィオラ・デイヴィス）。ミラー夫人を学校に呼び出したのはシスター・アロイス。その目的は、ドナルドとフリン神父との不適切な関係を裏づけるための事情聴取。こんな刑事のようなことも、シスター・アロイスにとっては聖職者にある者としての大切な職務と考えているわけだ。

生きていくために働かなければならぬミラー夫人が、事情聴取に応じるためにとれる時間は30分ほど。そこで校長室内での話し合いだけでは時間的に不十分と考えたシスター・アロイスは、ミラー夫人の帰り道を一緒に歩きながら話そうとしたから、その職務熱心さには恐れ入る。ちなみに、「枕を持って屋根の上に登った女性がナイフで枕を切り開いた結果、周囲に広がり落ちていく羽を、女性は拾い集めることができるだろうか？」と問題提起をし、「噂とはそういうものだ」と何とも含蓄のある説教を終えたばかりのフリン神父が偶然通りかかった時に見えたのが校長室に入っているミラー夫人。「なぜミラー夫人を呼んだのだ！」と詰め寄るフリン神父とシスター・アロイスとの会話劇がこの映画のラストのクライマックスだが、その伏線として用意されているのが、ミラー夫人の自宅近くになって俄然白熱する、ドナルドの「ある性質」をめぐるシスター・アロイスとミラー夫人との議論。

「ある性質」が問題？それとも「ある行動」が？

もともとミラー夫人はフリン神父のファン。なぜならフリン神父はドナルドを何かと気にかけてくれ、何かと親切にしてくれているから。それに対して、シスター・アロイスが「フリン神父はドナルドに対して不適切な関係を求めているダウトがある」と水を向け

ると、そこでミラー夫人は「それを望む子もいる」と何とも意外な告白を。

ミラー夫人が期待しているのは、ドナルドが何の問題も起こさず無事セント・ニコラス・スクールを無事卒業すること。そうすれば、次のハイスクールやカレッジへの道が自動的に開かれるのだから。ところがセント・ニコラス・スクールで問題を起こし退学処分でも受ければ、ドナルドの一生は台無し。ドナルドは公立校では殺されてしまうと考えてセント・ニコラス・スクールへ入学させたのだから、なんとしても問題を起こさずに卒業させたい。ミラー夫人は涙を浮かべながら懸命にそう訴えたが、それを望む「ある性質」が問題なのか、それとも、「ある行動」をとったことが問題なのかは別として、ミラー夫人の話聞いたシスター・アロイスがそこで立てた方針は「ドナルドの退学」？それとも「フリン神父の追放」？

私の考えでは、ドナルドの「ある行動」について問題提起をし質問してくるシスター・アロイスに対してミラー夫人がまともに応じ、ドナルドの「ある性質」について、ペラペラと告白したのがまちがひ。つまり、ミラー夫人がそんな告白をしなければ、世の中のことを知ってるつもりでも実はあまりわかっていない(?)シスター・アロイスの、フリン神父に対する「ダウト」が「確信」に転じることはなかったのでは？

ちなみに、ミラー夫人を演じたヴィオラ・デイヴィスがゴールデングローブ賞助演女優賞にノミネートされたのは、このメリル・ストリープとの短い会話劇のおかげ(?)だから、その効率の良さは抜群。

見どころ会話劇 その3、アロイスVSフリン神父

プレスシートによれば「シスター・アロイス役をメリル・ストリープが引き受けたことで、フリン神父を演ずる俳優の選択肢はぐっと狭まり、クライマックスで彼女と対峙できるほどのパワフルな人物が必要となった」らしい。そこで白羽の矢が立ったのがフィリップ・シーモア・ホフマン。たしかに『カポータィ』(05年)でアカデミー賞とゴールデングローブ賞を受賞した彼の存在感は大きい。

自分の説教中にミラー夫人を校長室に呼び出したことに血相を変えて怒鳴り込んできたフリン神父は、シスター・アロイスに対して一気にそれまでの不満を爆発させ、「自分に対する根拠のない反対運動を直ちにやめろ」と迫ったが、そんな迫力にたじろぐシスター・アロイスではない。それどころか逆に「私は確信もっている。だからあなたは司祭の職を辞任しなさい」と迫ってきたからすごい。『フロストxニクソン』(08年)は全米進出の夢をかける司会者と政界復帰を目指す元大統領との熾烈なトークバトルだったが、本作の白熱したラスト15分間のシスター・アロイスとフリン神父の会話劇、というより「言葉のバトル」の迫力もすごい。

2009年5月から実施される裁判員裁判でもこんな迫力ある検察側VS弁護側のバトルを期待したいものだが、そういう裁判を実現するためには本作のような会話劇、言葉に

よるバトルを学ぶことが不可欠だ。暴力に訴えることもなく、感情に流された議論に陥ることもなく、たまには大声を出すものの声の大きさ合戦になることもなく、あくまで冷静に言葉を選びながら展開されるシスター・アロイスとフリン神父の「言葉のバトル」はとにかく最高！裁判員裁判実施に向けて弁護士・裁判員へのプレゼン能力向上のための研修が盛んだが、そんなくたらない「授業」を受けるより、こんな映画のこんな会話劇から学ぶことの方が大きいのでは・・・？

勝負の決着は、あなた自身の目で

この映画には3つの対話劇の中で、「疑惑」「確信」「立証」「証拠」などの法律用語(?)や「告白」「懺悔」「告解」などの宗教用語(?)が頻りに登場する。また、「証拠はあるのか」「立証はできないが、確信がある」「確信があると言っても、それは感情だ」などの法律的フレーズ(?)や、「罪を犯したことはあるが、それは告白し懺悔して許されてきた」「辞任は告解と同じだ」「悪を駆逐するためには、神から遠ざかることもある」などの宗教的フレーズ(?)が強く印象に残る。

司祭の任命権は主任司祭にあるらしい。15分間にわたる激論を終え、あくまで辞任を求めるシスター・アロイスはフリン神父を校長室に残し、「電話は自由に使ってくれ」と言い放って出て行ったが、さて1人残ったフリン神父はそこでいかなる行動を?少なくとも彼は自分の気持を整理し、愛用する聖書を机の上に置き、電話に手をかけたことはまちがいないが、さてその架電先は?そして、そこで彼が告げたことは?それはあなた自身の目でしっかりと。

最後の説教は?

あの迫力あるバトルシーンから舞台は変わり、大聖堂におけるフリン神父の3度目つまり最後の説教のシーンとなる。そこで彼が話すのは、「別れることはつらいが、それはやむをえない」という辞任の言葉。フリン神父は今まで親しくつき合ってきた生徒や信者たち1人1人の手を握り、別れのあいさつを述べていった。するとやっぱり、勝負はシスター・アロイスの勝ち・・・?たしかに、フリン神父がセント・ニコラス・スクールを去ることになったのはまちがいないが、それはシスター・アロイスの追放劇が成功したため?

最後のシーンとなるシスター・アロイスとシスター・ジェームズの静かな会話を聞いていると、意外にそうでもないようだ。シスター・アロイスとフリン神父の勝負の行方とは別に、世間におけるシスター・アロイスとフリン神父の評価は?そして、それにもとづいて下されたフリン神父の処遇は?ひょんなきっかけから生まれ、シスター・アロイスの心の中で大きく広がっていった「ダウト」がこんな大事件になるうとは!

この映画はもちろんシスター・アロイスとフリン神父の価値観について、あるいはシスター・アロイスによるフリン神父の追放劇についてどちらの側にも立っておらず、そ



「ダウト-あるカトリック学校で-」

(梅田ガーデンシネマで公開中)

疑惑と確信の境界線は？

第八十一回米国アカデミー賞は「スラムドッグ\$ミリオネア」の庄勝たつたが、本作も校長(メリアル・ストリープ)、神父(フィリップ・シーモア・ホフマン)、生徒の母親(ヴィオラ・デイヴ

イス)が主演女優、助演女優の各候補になり注目された。トランプで「ダウト」を宣言されバレた場合、場の札を引き取れば済むが、すべてを疑惑の目で見ることを是とする厳格な校長が自由で開かれた教会を目指す神父にかけたダウトは、黒人男子生徒との「不適切な関係」だから大変。礼拝の侍者に抜擢された生徒が司祭館から酒臭い息で教室に戻ったのが発端。「祭

壇用のワインをこっそり飲んだ彼を守ろうとした一との神父の弁明の真偽は？
校長のさらなる追及の次の一手は？ ケネディ大統領の暗殺、公民権運動の高揚など大きく米国内の価値観が転換した六〇年代。そんな時代背景下の小さな疑惑をめぐって展開される二人の会話劇は、法廷劇とは異質の、疑惑・確信・立証・証拠などの法律用語と告白・懺悔・告解などの宗教用語が交錯し圧倒的迫力。
「立証はできないが確信がある(校長) VS 「その確信自体が感情だ(神父)」の説得力は？ 「罪を犯したことはあるが、それを告白し懺悔して許されてきた」(神父) V
は、おえて神から遠ざかることもある(校長)の優劣は？
他方、母親への追及で判明したのは「それを受け入れる子もいること」の關。仮に「同性愛志向」はあっても「直接行動」しなければ問題はないか？
職務権限^{ミタ}濫用^{ミタ}気味の校長の追及に、神父は「排斥運動を止めろ」と怒り心頭だが、疑惑から確信に変わった校長の要求は司祭職の辞職。クライマックスでの息も付かせぬ二人の論議は庄巻！さて独り校長室に残った神父の電話した先は？ 最後の説教で神父は生徒と信者たちに別れを告げるが、さて真の勝者は？
すべてに確信が持てない現代、疑惑とどう向き合うのか？ それを本作から学びたい。